

[名古屋大学教育発達科学研究科 2011 年度修士論文抄録]

外国人生徒の高校進学に影響を与える要因の検討 —外国人生徒の人間関係に注目して—

細川 卓哉

<修論要約>

1989 年の入管法改正により日系人の就労を可能にした在留資格である「定住者」が創設された。この法改正により日本はそれまでよりもさらに多くの外国人労働者を迎え入れることになった。その後、彼らが家族を日本に呼び寄せたことで、日本の学校に彼らの子どもが在籍するようになった。その後、教育現場では外国人児童・生徒¹の学校への適応や日本語指導などの学習支援にかんする教育上の問題に直面することになった。

当初、外国人児童・生徒は日本に短期間滞在するものとみなされていたため、学校への適応や彼らに対する日本語教育に関する事柄が主たる課題と認識されていた。そのため、彼らが抱える教育上の課題についての研究もこのようなことをテーマとしてスタートした。しかし、広崎(2007)が述べるように、外国人児童・生徒の滞日が長期化するにつれて彼らを取り巻く問題は学力保障や義務教育終了後の進路保障へと拡大してきた。

外国人生徒やその家族が日本で生活することを選択すれば、高校卒業の資格は、就職をするにしても、高等教育機関に進学するにしてもほぼ必須の資格である。外国人生徒の高校進学にかんする議論は、彼らが利用しうる受験制度についての議論から始まり、その後は彼らに対する進路指導や彼らの進路意識に関する研究もみられるようになった。

本研究では、高校入試を経験した外国人に対するインタビューを通じて、彼らが高校進学に至った要因を彼らと親、教師、友人との間に築かれた人間関係の側面に注目して検討する。

インタビューに先だって、インタビュー어의プライバシーなどを守るために、自身が所属する研究科の倫理審査委員会に対して、調査の目的・方法・プライバシーに関する配慮事項をまとめた研究計画書を提出した。その後、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科及び名古屋大学発達心理精神科学教育心理センター研究倫理規定が定める審査を経て、調査を行う承認を得た。この承認の下 2011 年 10 月から 12 月にかけてインタビューを行った。なお、このインタビューの技法は半構造化面接である。

インタビューーは、日本の高校受験を経験した者で、1 対 1 の形式で各 1 時間程度のインタビューを行った。インタビューーは筆者の知人や知人の知人、研究参加者の知人である。また、インタビュー後に再度質問すべきことが出て来た研究参加者については、電話とメールで質問を行った。

その結果、彼らの進学に影響を与える要因として①親の滞在計画、②学校における日本語指導などの学習支援、③中学校の教師の進路指導、④外国人生徒に対する家族からのサポートが確認された。

①の親の滞日計画の場合、親の滞日が当初の予定よりも延びてしまっているのであれば、外国人生徒が日本での進学を親に訴えることで、親の日本での滞日計画が変化の中で、子どもをどこで進学させるかということが考慮されうるだろう。

②の学校における日本語指導などの学習支援の場合、外国人生徒にとって日本語は高校入試をする上でハードルになりうる。今回の研究参加者の場合、ほとんどが学校で日本語指導など学習をする上での支援を受けていた。外国人生徒にとっては、このような支援をできるだけ長く受けることができることが望ましい。日本語指導などの学習支援は直接彼らの進路選択に直接関係ないかもしれないが、選択しうる進路が増えるという点では外国人生徒の高校進学に影響を与えると言える。

③の中学校における教師からの進路指導の場合、今回の調査や先行研究から、外国人生徒は、多くの場合日本人と同じような進路指導を受けていると考えられる。しかし、日本人生徒への進路指導よりも細やかな進路指導が必要な場合や、教師の外国人生徒の教育に対する無関心によって進路指導を受けられない場合には、外国人生徒やその親が自らのニーズを教師に対して表明することで、中学校の教師からの進路指導に変化をもたらす可能性がある。

④の外国人生徒の家族からの子どもへのサポートの場合、子どもを励ますというようなサポートはどんな親にでもすぐに行うことができる。但し、中学校の教師から進路指導の対象から外れてしまった場合など、彼らの親がどのように対処すべきかがわからない問題の場合、彼らに対してできることは限られてしまう。しかし、外国人生徒の家族が来日後、新たに得た人との繋がりによってさまざまな情報を得ることができればそれを基にその子どもにサポートをすることもできる。

今後の研究上の課題については次の2点が考えられる。1点目は、外国人生徒と彼らの家族、日本の学校という3者の関係とそれぞれが持つネットワークについてである。今回の研究において、多くの場合、外国人生徒は高校受験を受ける際、学校の教師や親から指導やサポートを受けていた。しかし、インタビューの中には、学校の教師から十分な指導を受けることができなかった生徒も存在した。このインタビューの場合は家族のサポートを得て、高校受験に関する情報にアクセスすることが出来た。このことから、外国人生徒は、彼らの家族や日本の学校からのサポートや、外国人生徒・彼らの家族・日本の学校のそれぞれが持つネットワークを利用して高校進学に関する情報を得ていると考えられる。そのため、今後は彼らの持つネットワークを社会関係資本の観点から観察し、それが外国人生徒の教育にどのような影響を与えるかを分析する必要があると考えられる。

2点目は、高校進学が彼らの進路観に与えた影響についてである。この点について今井(2008)が外国人生徒の描く将来展望についてインタビュー調査を行っているが、高校での教育が彼らの進路観にどのように影響を与え、将来どのような場所で働くかという具体的なイメージをどの程度彼らに持たせることができるのかについて再検討される必要があると思われる。

註1) 本研究において、外国人児童、外国人生徒、外国人児童・生徒という言葉は、高見澤(監)(2004)で定義されているニューカマー(日本経済の国際化に伴って1970年代以降、新たに日本に來住した外国人)を意味している。

<参考文献>

- 広崎純子 (2007) 進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択—支援活動の取組を通じての変容過程— 教育社会学研究, 80, 227-245.
- 今井貴代子 (2008) 「今—ここ」から描かれる将来 志水宏吉(編) 高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援— 明石書店, p.p.182-197
- 高見澤孟(監) (2004) 新・はじめての日本語教育 基本用語辞典 アスク出版